**能登―珠洲市寺家（じけ）地区支援 飯舘村民チーム活動報告**

**（第一報ドラフト）**

　　　いいたてクリニック

　　　健やかに暮らせるいいたての会

　　　ふくしま再生の会

　　　阿武隈クラブIITATE

　　　ＮＧＯシェア＝国際保健協力市民の会

　　　　　　本田　徹　記

**旅程および報告**

**2月1日**（木）３ｐｍころ長田整骨院を出発。長田卓也、猪股貴宏、本田徹の3名。

猪股さんは阿武隈クラブIITATEの常勤スタッフ、介護職。

2台の車に積めるだけの、支援物資（食料、医薬品、マッサージ治療具、衣類、衛生材料、菓子、日本、酒・ビール類など）、加えて3人が使う、シュラフ、毛布などの防寒具、ヘルメット、長靴、スペアのタイヤなどなど）を積む。今回のお土産の目玉は長田さんが栃木の農家から寄贈された、90箱の新鮮なイチゴだった。

　一回目に長田さんが現地に向かう際、飯舘村役場からは、被災自治体から正式にボランティア受け入れの方針が示されるまでは、個人のボランティアが出かけるのは勧められないと、村が「災害救援車両」証明書を発行するのを断られた。初回の出動では、長田さんは仕方なく、自腹を切って、福島―被災地間、往復2万円近い高速道路通過料を払った。しかし、ここで負けていないところが彼らしい。2回目には事前に福島県庁を訪れ、阿武隈クラブIITATEという法人の職員であることを認めてもらい、無事災害救援車両証明書を交付してもらい、無料で高速を使えるようになった。猪股さんに関しては、役場の石井健康福祉課長の口添えもあり、さらに、阿武隈クラブ会長の小林美恵子さんが申し入れた結果、村内の法人として活動実績が認められ、猪股さんの車の証明書は村から交付された。

　基本的に能登半島に至るまでは順調に高速道路で移動できるが、氷見、七尾に入るあたりから道路状況が急激に悪化し、陥没、分断、がけ崩れなどで迂回を強いられ、平均速度10km/時になることがあるため（県道・国道管理者、自衛隊必死の復旧作業で日々改善はしているが）、できるだけ半島手前まで1日目のうちに着こうということで、富山を目指す。飯舘村から川俣へ降り、福島市内を迂回し国道4号を南下し、二本松で高速に乗る。いわき方面を目指し、郡山Jで磐越道に乗る。雪もよいの天候の中、会津経由、新潟県に入り、長岡Jで、北陸道へ。20：45　富山着。投宿。翌日の行動予定、食事をしながら長田さんから説明を受け、3人で明日からの打ち合わせ。

**2月2日**（金）

朝5時ビジネスホテルを出発。国道8号に乗り氷見市から無料の高速・能越自動車道に乗り七尾城山で高速を降り、半島の外縁をほぼ全周する国道２４９に乗り、北上する。現時点では、249号は輪島―珠洲間で複数個所で崩落などのため交通が遮断されており、両市間の往来は大きく迂回して陸路を行くか、海路、空路（ヘリなど）が中心となる。両市に直接つながるハブの役割を果たしているのが、穴水市だが、それでも輪島、珠洲方面は途中での迂回は避けがたい。なお穴水からは、鉄道が249号に並走しているが、線路が多数の箇所で崩壊し、復旧の見通しは立たない。

　珠洲の目的地は、寺家（じけ）と呼ばれる、半島北東端の海沿いの地域で、ここに、伝承では崇神天皇のころ、約2000年前に建立されたとされる須須神社がある。午前10時過ぎくらいに神社境内に到着。ここの神主の多田千鶴さんが私たちを受け入れてくださった方。この神社の現宮司である、猿女（さるめ）貞信氏の娘。猿女は由緒ある姓。貞信氏は男性。８0歳を越え、病気をされ自宅療養中とのこと。千鶴さんは伊勢の皇学館大学で神道を学び、神官の試験にも通っている。千鶴さんは結婚し、いったん猿女家を離れ、夫、息子一人と3人暮らしを珠洲市内でしているが、神職は父の病気もあり続けている。今回の震災を機に、金沢で公務員をしている兄が家に戻って正式に猿女家を継いでくれる決心を固めた由で、ほっとしていると、千鶴氏。

千鶴さんは、寺家という200家族弱の比較的小さな、漁業と農業を中心とするこの集落の人々を心から愛し、大きく被災した神社周辺のコミュニティの再建のため日々奔走されている。この神社が直接支援する、自主避難所は4か所とのこと。実は、神社自体も２つある神殿、高座宮（たかくらのみや）と金分宮（きんぶんのみや）のうち、高座宮が壊滅的というに近い被害を被ったが、いまはそれよりも、津波と地震によって多くの犠牲者・避難者を出した地域の復興が第一と考えておられる。まだ若いながらしっかりした、また前向きなお考えの持ち主で、我々3人は彼女の志に感銘を受けた。

　私たちの持参した支援物資のうち一番喜ばれたのは、栃木の谷中農園（多分、田中正造ゆかりの土地）から寄贈された90箱の新鮮で高級なイチゴで、インスタントの食品に飽き、野菜や果物が欠乏していた、避難所の方々に大変喜んでいただけた。

　多田さんがサポートする４か所の自主避難所のうち一番大きいのが川上本町集会場で、20－25人くらいの方が、逗留されている。ここは地域の公民館で、キャパシティも他に比べて大きい。ここで、長田さん、猪股さんは早速、マッサージや温熱器による腰痛や膝痛、肩こりなどの施療を始められ、順番待ちができていた。

他の自主避難所は、一般の民家のうち家主の好意で、または留守宅などを利用して、5人前後の滞在者が支援を受けながら暮らしておられる。物資は千鶴さんたちが、定期的に訪問し、届けている。避難所の滞在人口は流動的だが、少しずつは、金沢などの遠方へさらに避難していく人があり、また比較的軽微な自宅の損壊の場合は、応急的な修理が済み次第戻られるため、避難所人口は漸減の傾向にあるのだろう。また珠洲市内でも仮設住宅の建設が急ピッチで進められている。

　二か所目に訪れたのが、大浜集会所でここには6人の避難者が暮らしておられる。この家に避難する94歳の女性とお話したり、診察をさせていただいた。環境が変わったので、便がよく出ないと訴えられていた。お持ちの薬を調べると、酸化マグネシウムの錠剤が頓服用で、震災前にかかりつけだった医師から処方されており、その服用法についてご説明するだけで安心された様子だった。このお婆さんにもイチゴのパックを1箱差し上げたら、喜んでいいただけた。

　この日、午後に市役所、及び保健センターに表敬。ＤＭＡＴも入っており、50か所以上の公設及び民間の避難所を手分けして巡回している。ボランティアの受け入れは、まだ始まっていないが、2日後くらいに受け入れ開始となるようだった。また、県外から多数の保健師、行政の関係者が支援に入っている。まだ混乱を極めており、致し方のないところでもあるが、建物が異なることもあり、役所内の医療・福祉・介護などの担当者間の連携はあまりよく取れていない印象だった。ただし、最後に面談した、福祉課の担当者（女性）は丁寧に接遇してくださり、有益な情報をくださった。

　午後2時頃から、寺家からすこし離れた、三崎中学校の体育館に急遽作られた公設避難所を訪問。80名くらいの避難者が逗留しておられる。ただ、昼間は避難所から通勤や生業に出られている方もかなりいるようで、比較的閑散としている。

　長田さんからあらかじめ聞いてはいたが、公設の避難所と民間の自主避難所との間では、物資の潤沢さ、暖房やシャワー設備、トイレなどにおいて、かなりの格差があると感じた。三崎中では、インスタント食品以外に、電子レンジ用のお米のパック、衛生材料（マスク、手指消毒剤）などなどすべてあり余るほど取り揃えてあり、各人が勝手に好きなだけ持っていけるようになっている。炊き出しなども、外部からの支援団体が校庭で行っている。また、ボランティアなども変わるがわる三崎中には入っている。日本財団の若い女性たちが、丁寧に足浴などのケアを行っていた。

水が出ない、下水が流せないことは、避難者、とくに足腰の弱った高齢者には、大きな心理的また移動上の負担になっていることは容易に察しがつく。体育館屋内のトイレは、尿に至るまで1回1回便器にはめた黒いプラスチックの袋に入れることを義務づけており、男子用のトイレはすべて使用禁止、便器にまたがって小水もするように張り紙がしてある。

トイレに関しては、日本財団が屋外に設置した、移動式トイレの方が便利で、一応水洗の設備になっていた。

ここでも、長田さんたちのマッサージはひっぱりダコだった。重くかさばる、マッサージ用のベッドから電気治療器まで車にもちこんだ気迫はさすがであった。多分この日だけで20名以上の方々の施療をしていたと思う。私は、5－6名（多く高齢女性）の方のお話を傾聴させていただき、診察の上で2人ほどの方に痛みどめ、風邪薬程度のお薬を差し上げた。

夕方、野宿（車中泊）のつもりでいたところ、多田神主が、被害の少なかった金分宮の社殿で泊ってよいとおっしゃってくださり、本当に助かった。石油ストーブや焼き肉などまで差し入れてくださった。差し入れを届けてくださるとき、私たちの車座に1時間ほど、加わり、地域の歴史や試練を被った村の現況など、気さくに説明してくださった。

ここに一晩泊めていただいたことで、私たち3人も「神さびた」感じになった。何としてもこのコミュニティの復興をお手伝いしたいと、お酒の勢いも借りて話し合った。

**2月2日（金）**

　朝早く、神社にほど近い川上本町集会場の避難所を訪ね、診察や施療の必要な人がおられるか確認。アポを取り、地元で冬季のカニ漁を専門にやっている方のお話を伺う。阿武隈クラブいいたては、短期マイグラント（移住労働者）としての助っ人業務を、事業としてやっており、仙台などには頻繁に長田さんと猪股さんで出張している。自分たちを、誇りをもって「便利屋」稼業と呼ぶ。長田さんとしては、被災したコミュニティどうしで、いかに生業を通して連帯していくかを、真剣に考えていて、緊急フェーズが終われば、そちらに軸足を移して、長い目でウインウインの状況を、飯舘村と珠洲市寺家の間で協力して作り上げていきたいと、さまざま構想を練っている。もちろん資金獲得が重要な課題だ。

手始めに、もし地盤が大きく隆起してしまった沿岸の蟹などの漁場が回復するようなら、来年冬は飯舘から若者が何人か漁の手伝いに来る。反対に夏場は、インゲンなどの高原野菜の収穫に珠洲の漁師さんに飯舘村まで手伝いに来てもらう、といったことも、可能なのではないか。

寺家の区長さんも、漁師の方も長田さんの話に真剣に耳を傾けてくださったようだ。

あまり治療を希望する方がおられなかったので、今日は10時過ぎには、寺家を出発し、帰路すこしルートを変えて、また富山に一泊。駅内の海鮮料理の店で、3人そろって今回の短い支援の旅の総括をし、美味しくお酒と刺身をいただいた。

**2月3日（土）**

朝9時ころ出発。途中の道路状況も比較的良好で、飯舘村に午後2時過ぎには、ベースとなっている長田接骨院に帰着した。

＜まとめ＞

大変なところもあったが、ロートルの本田をいたわりつつ、同行いただいた若いお二人にまず感謝したい。

　やはり、若者の突破力はすごい、と改めて感じる。義侠心の塊の長田さんが、なんの「つて」もないまま、発災間もない1月10日には、車にありったけの支援物資を積み込み、施療具もいれて「鉄砲玉よろしく」出発し、輪島で重蔵神社という地域のハブになる重要な社（やしろ）の神職の方々と出会い、また北陸ライオンズクラブとも繋がりを作り、今回の珠洲行きも、輪島からの、強固な、いわば「神職ネットワーク」により須須神社にコネクションをつけていただき、珠洲に着けば、旧知の仲のように、多田神主さんに温かく迎えていただけた。

　11年前に、ふくしま再生の会の田尾さん、中町さんたちのチームが、飯舘村の避難者の方々が村外で暮らす南相馬や福島の仮設にアウトリーチをかけ、「健康いちばん」というユニークな支援活動、ヘルスプロモーションの自主サークルを、村民参加の上多職種で開始し、今に至っているように、今後、津波震災、原発震災（部分的に電源を失った志賀原発も危機管理下にある）に陥ったコミュニティどうしが、生業（なりわい）、医療、福祉、介護の分野でつながって、過疎の村を立て直していく営みは、困難を極めるとして、挑戦のしがいはあるだろう。すくなくとも、Inactionのまま、どんどん衰退し、消滅していく村にしないために、真剣な模索をする若者たちを応援し、彼らの仲間を増やし、村で働き、家族を作れるような、Visionをもちたい。

本レポートには、誤記や事実と異なる記述も見られるかと思う。その意味で、長田さん、猪股さん、多田神職にも、必要なご修正をお願いしたい。

　付属資料）写真集

　（2024．2．10）